

超高齢化社会が日本の現実となりつつある今、地域医療にはコミュニケーションが大切と言われる。医師として地域住民の生活をサポートしていく中で、医師と患者間、多職種連携においてどうコミュニケーションをとるべきか、という関心を抱いていた。

そのような中、地域医療支援病院である、坂総合病院の1日医師体験に参加する機会を得た。この病院は仙台医療圏に属し、2市3町を診療圏とした急性期病院である。令和5年度の高齢人口調査によると、この地域の高齢化率は29.9%。全国平均の29.1%を上回っている。日本の未来の姿として、命に向き合う現場を身近に感じることが出来る貴重な機会だ。しかし、準備をしていた矢先、膝に怪我を負い、松葉杖での生活となってしまった。移動に時間がかかり迷惑をかけてしまうため、参加の辞退も考えたが現場体験をしたいという想いを伝えたところ、車椅子での実習が実現した。この経験のおかげで私は地域医療の原点を知ることができたのだ。

それは、人と人との関わりが全ての土台となるということだ。車椅子で院内を回る私に、あらゆる場所で職員の皆さんを初め患者さんにも「頑張って」と沢山声をかけていただいた。院内は、互いに相手を思い、受け入れる温かな雰囲気にも包まれていたのだ。この温かさは院長先生の人との関わり方にあった。

「人に興味をもちなさい」外来見学の際、先生が私の医師になりたい理由を聞き最初に発した言葉だ。この言葉に私は胸をつかれた。私は人体が好きで臓器や構造に没頭するあまり患者ではなく患者の病ばかりに焦点が合っていた。このことを先生は見抜いたのだ。他者と関わりをもつことは信頼関係を築くこと。築いた信頼関係は患者さんの背景を知り、検査の数値や画像では見えない些細な変化を発見することを助ける。先生は一人一人との時間を一杯設け、背景を踏まえて患者さんが本当に求めていることに対して真摯に向き合っていた。人と人との信頼関係をおろそかにして見落とすことがないようこの言葉で教えて下さったのだと思う。患者さんに寄り添った医療を提供できる所以は多職種のサポートによっている。医師体験中、社会福祉士さんと話す機会もあった。寿命をのばすだけが医療ではない。患者さんが本当に望んでいることや解決点を見つけ、本人を含めたチームで解決していく体制を説明して下さいました。じっくりと生活背景などを知ることは医師一人だけでは不可能であり、それぞれが得た情報を共有する必要がある。医師と患者の交流の場である講演会や座談会など、職員と患者の相互の興味が地域医療という強固なネットワークを育てているのだろう。

地域とは過疎地域ではなく、日常生活圏を指す。このネットワークは都市部にも必要である。表面化しない想いを汲み取ることで本当に患者さんが望む医療を提供し、医療から切り離されることのない、人と人との関わり続ける社会を実現させたい。 (1200字)